

18. 学校制度と中宮社会(中宮)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 伸二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4862

18. 学校制度と中宮社会

鈴木伸二

- I はじめに
- II 中宮における学校制度と施設
- III 高校進学の意味
- IV 進学意識の変容
- V 教育職への従事・就職
- VI まとめ

I はじめに

普通、人が学校をイメージすると、教室であったり先生であったりするだろう。かつて自分が見た景色は、それ自体が記憶となって残っている。おそらく学校をイメージしろと言われて、学校がおかれている社会環境などを想像する人はいまい。学校はその人の記憶の中で、自立的なものとして残っているのだ。教育学が対象とする学校もまた、社会から切り離された自律的なものとして扱われる傾向がある。本稿ではそのような立場を取らず、学校が社会と緊密な関係を持つということを前提とする。その立場にたって、1872年に学制が發布されて以来、学校制度が地域社会にどのような影響を与えて来たのかを、中宮を通して考察してみる。ただし一概に学校と言っても、時代によってその性質は異なってくると思われる。そのためここでは、通時的な視点を重視する。

IIでは学校制度が導入され、教育の場である施設がどのように設置されてきたのかを概観する。IIIでは『中宮中学校卒業生』と『吉野谷中学校卒業生名簿』から中宮出身の中学卒業生の、1947年から1989年までの高校進学の動態と進学の持つ意味を分析する。IVでは学校教育が中宮に住むこと、中宮から出ることといかに関係しているのかを特定の家系を通して論じる。Vにおいては、中宮在住者および出身者で、学校関係の職についている人に焦点を当てることによって、地域社会と学校の関係や職業としての教師を考察する。

II 中宮における学校制度と施設

中宮での近代的学校制度の導入は1872年の学制をうけて、民家を借用し小学校を置いた1875年である。設置当時の就学生徒は男子58人、女子2人であった。その後1894年に吉野谷南尋常小学校中宮分教場となる。1912年に湯元、木和田原の2カ所に定期出作地分教場が開設される。これは焼畑を生業とする家庭の児童で、中宮分教場まで通学できない者のために設置された。この出作地分教場は1918年に、清水平にも増設される。1915年には、南尋常小学校が市原尋常小学校に

改められ、中宮分教場も市原尋常小学校の所属となる。1920年分教場の校舎が建設される。建築費用は中宮により出資された。1942年高等科が中宮分教場に設置されることになり、中宮在住の高等科生徒が市原まで通学する必要がなくなる。1947年学制改革により中宮小中学校となり、1968年の吉野谷小中学校への統合まで続く。

中宮分教場の校舎建設までは、民家が使用されていたわけであるが、初等科は1912年から1916年まで安本彦五郎宅、杉本仁助宅、西田三吉宅の3軒に、1917年からは3つの道場に収容し、冬季は山根喜三郎宅を借り受けている。また、1942年の高等科設置にあたっても瀬川又右エ門宅を使用している。さらに1944年に突風で校舎が倒壊し、3道場を仮学舎として用いたが、1945年の大火後は新校舎が建設された。

Ⅲ 高校進学の意味

本節では『中宮中学校卒業生』および『吉野谷中学校卒業生名簿』をもとに、1947年から1989年までの、中宮中学校および中宮出身の吉野谷中学校卒業生を対象として、高校進学がどのように地域社会と関わっているのか考察してゆく。この考察に際して、中宮中学校の1947年から1967年までをA期、吉野谷中学校の1968年から1989年までをB期と記述する。A、B期の卒業生総数は358名（A期260名、B期98名）で、そのうち高校、大学進学者については判明している。高校進学者（専門学校を含む）の総数は199名（A期112名、B期87名）、大学進学者は41名（A期23名、B期18名）である。ここでは主に高校進学を中心に議論を進めたい（表-1）。

中宮において高校進学率が60%以上となるのは1963年以降で、ほぼ100%になったのは1971年以降である。進学先は鶴来高校が109名に上っている。A期に鶴来高校へ進学した者は57名、B期の同校への進学は52名と同高校への進学は安定している。この第一要因は中宮から同高校が地理的に近いためであろう。しかし、鶴来高校への進学者で大学に進学した者は10名しかなく、B期の52名中で大学にまで進学したのは3名にとどまっている。鶴来高校への進学者が大学へ進学する割合はA期で12.2%、B期で5.7%となっており、B期の方が同高校からの大学進学が減少している。

中宮における高校進学で特徴的なものとして、男子の工業系高校および専門学校（この専門学校という範疇には、北陸電力専属の養成学校も含めている）への進学が上げられる。男子に限ればA期の中学卒業生は136名、内進学した者が62名、工業系への進学は鶴来高校進学者27名に次ぐ20名で、男子進学者の32.3%に及んでいる。このような工業系高校への進学という特徴は、中宮地域の職業選択と大きな関わりをもっているように思われる。中宮では1935年の中宮尾谷発電所完成以来、北陸電力を中心とする電源開発企業への就職が盛んであった。北陸電力への就職はA期に集中しており、延べ人数は20名になる。内訳は表-2の通りである。A期の工業系高校および専門学校進学者20名中、13名が北陸電力に就職している。高校選択に際して北陸電力就職

が大きな要素となっていたことは間違いないだろう。一方B期の工業系高校への進学が減少しているのは(計4名)、1970年代に入って北陸電力の新規雇用が減少したことと関係する。

いずれにしても、A期とB期では高校進学という現象に変化が生じている。これは進学率の向上だけではなく、進学の意味が変わったことを示唆している。この高校進学の意味という視点からみると、1947年から1989年は4期に分けられるだろう(表-3)。第1期は1947年から1954年まで、第2期は1955年から1962年で、この期間は高校進学が中宮において一般化されて行く過程であったといえる。第3期は1963年から1970年で、一般化された高校進学が大学進学へのステップとなった期間である。この期間の卒業生数は104名で平均高校進学率は70.9%となっている。第4期は1971年から現在までである。この期間は中宮出身者の高校進学動向が安定しており、高校進学率平均は95.8%に達している。

では、高校進学の意味がどのように変化しているのかを具体的に考察してみたいと思う。第1期において高校進学は少数派であり、且つかなり男子に限定されたものであったといえる。第2期になると進学者数も増加し、男子と女子の進学率の差は減少してくる。ただその後も進学率の差は残存する。

表-1 中宮の中学校卒業者の高等教育機関への進学動向(1947-1989年)

年 度	中学校卒業生数			高校進学者数			
	計	男子	女子	計	男子	女子	
A 期 (中宮 中学校)	1947	11	10	1	0	0	0
		9	6	3	3	3	0
		13	10	3	3	3	0
	1950	20	13	7	5	4	1
		7	2	5	1	0	1
		5	3	2	2	2	0
	1955	10	2	8	1	0	1
		8	6	2	1	1	0
		14	7	7	4	3	1
	1960	9	5	4	4	2	2
		11	8	3	5	3	2
		23	12	11	11	5	6
		10	3	7	5	2	3
		6	3	3	2	2	0
		10	3	7	4	1	3
	1965	17	7	10	6	3	3
		23	11	12	14	7	7
		12	5	7	10	4	6
		16	8	8	11	7	4
		17	9	8	13	7	6
B 期 (吉野 谷中 学校)	1970	9	3	6	7	3	4
		6	3	3	4	3	1
		12	5	7	9	4	5
		8	1	7	5	1	4
		6	1	5	6	1	5
	1975	7	3	4	7	3	4
		7	3	4	6	3	3
		4	0	4	4	0	4
		6	2	4	5	2	3
		1	1	0	1	1	0
	1980	4	2	2	4	2	2
		3	1	2	3	1	2
		4	1	3	4	1	3
		3	2	1	3	3	0
		4	2	2	4	2	2
	1985	2	1	1	2	1	1
		4	2	2	4	2	2
		2	0	2	2	0	2
		5	2	3	5	2	3
		2	0	2	2	0	2
1989	1	0	1	1	0	1	
	5	3	2	4	2	2	
	2	2	0	2	2	0	
計	358	173	185	199	98	101	

表-2 北陸電力就労者の内訳

採用時の学歴	人数	中 学 卒 業 年 度
中 学 校 卒	4	1947, 1948, 1951, 1956
工 業 系 高 校 卒	7	1948, 1951, 1955, 1956 (2名), 1960, 1967
鶴 来 高 校 卒	3	1951, 1958, 1959
北電養成学校卒	6	1958 (2名), 1961, 1964 (2名), 1966

表-3 中宮での高校進学率の変化

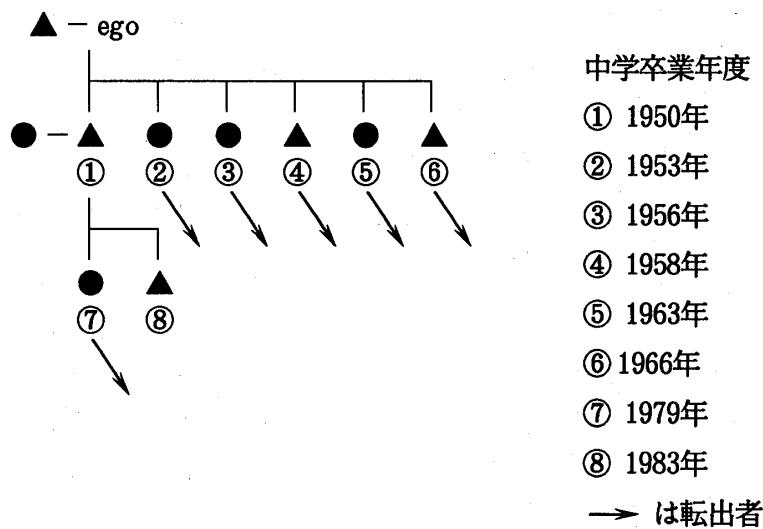
年 度	期 間	平 均 高 校 進 学 率 (%)		
		計	男 子	女 子
1947 - 54	第 1 期	19.3	25.0	9.7
1955 - 62	第 2 期	41.0	43.8	38.5
1963 - 70	第 3 期	70.9	80.0	63.8
1971 - 89	第 4 期	95.8	100.0	93.2

第1、2期にある程度共通して言えるのは、高校進学自体が将来への投資ともいえる学歴の獲得であったことだろう（学歴が将来への投資であると想定し、以後「学歴資本」と呼ぶことにする。またこの学歴資本の使用者は一般に男子であることも言及しておく）。これは先の工業系高校への進学を見直してみるとよかろう。特に第2期では北陸電力に就職した10名中5名が工業系高校進学者で、2名が鶴来高校進学者である。同じ北陸電力への就職でも、第3期では就職者4名中3名が北陸電力付属の養成学校からで、高校進学が北陸電力就職のための学歴資本とはあまりなっていない。一方第3期に大学に進学した人は中宮中学校卒業生103名中22名（21.3%）に及んでいる。第1、2期を通して3名しか大学へ進学していなかったことから、第3期の高校進学が大学へのステップとして機能し始めたと言えるだろう。しかしこの大学進学の手段としての高校進学の機能は、第4期において進展されるわけではなかった。第4期の中学卒業生総数は72名、うち大学へ進学した者は15名（20.8%）で進学率は停滞している。このことから第4期の高校進学は、第2期の学歴資本の獲得や第3期の高等教育へのアクセス手段として戦略的に指向されるものというよりも、中学校の延長線上に位置するような一般的行為となっていたといえよう。

IV 進学意識の変容

この節では進学意識の変容をN家のケース・スタディという形で見て行こうと思う。このN家の構成は図-1の通りである。インフォーマントをegoとして作図してする。egoは1917年生まれで、H家の長女として生まれた。egoの父はH家の本家にあたる。その後、egoはN家に嫁ぎ6子をもうける。長男①は北陸電力に就職を希望し、同社で働く伯父からそのためには進学するべきだと助言されて、1950年金沢市立工業高校へ進学する。高校卒業後臨時採用で北陸電力に就職するが退職し、地元建築関係の仕事に転職する。長女②は1953年、中宮中学校卒業後鶴来の洋裁学校に進んだ。通学は不可能だったので下宿をした。この②は洋裁学校卒業後、大阪在住の中宮出身者の子息と結婚し、現在も大阪に在住している。この結婚は自分の出身地の娘を息子の嫁にもらいたいという、先方の強い要望による。次女の③も1956年中学卒業後、鶴来の和裁学校に進んだ。その後京都の電気会社（中宮出身者が経営している）に就職、同地で同僚と結婚し現在も京都在住である。次男の④は1958年福井実業高校に進学、卒業後②を頼って大阪に出て、そこで就職する。3女の⑤は1962年②の誘いで中学3年時に大阪に転校した。これは大阪の方が中宮で高校に進学するよりも選択肢が多いと②に薦められたためであった。そして⑤はそのまま大阪の高校に進学する。3男⑥も小松高校卒業後、②を頼って関西大学に進学し、そのまま大阪で就職をする。egoからでは孫にあたる⑦と⑧は吉野谷中学校卒業後、鶴来高校に進学、⑦が高校卒業後和裁の専門学校に進み、その後結婚し市原に住んでいる。⑧は高校卒業後、地元企業に就職し、中宮に在住している。

図-1 N家の構成



ここまで ego を中心に N 家の構成員の移動を見て来たわけであるが、これをⅢの進学動向と比較してみる。このことによって進学に対する意識の変遷をある程度具体化できるだろう。

①の高校進学は就職のための学歴資本獲得という明白な意図があった。これは母方の伯父に北陸電力社員がおり、進学に際してその伯父から高校へ進学するよう助言されていることから明らかである。①の進学はⅢの第 1 期に当たり、北陸電力への就職に学歴資本が必要となってきたことを示している。②も第 1 期に中学校を卒業しており高校へは進学していない。しかし鶴来の和裁学校へは進んでおり、これは同家の経済状況と関連すると思われる。③④は第 2 期に属しており、この 2 名の進学状況はこの期間の意識をかいまみるうえで参考になるかもしれない。③は第 2 期の初期のころで、姉の影響もあり洋裁学校に進むことになった。④は第 2 期中頃に高校へ進学したが、その後大学へは進学していない。⑤は 1962 年に転校しているが、中宮中学校をそのまま卒業していたら第 3 期に当たる。この期間の中宮では、大学などの高等教育や各種専門教育に対する意識が芽生え始めたようだ。N 家の場合、⑤に対して②が、中宮では高校進学を選択肢が少ないと助言していることも、第 2 期においてより良い学校教育を受けようとする意識の現われであろう。⑥も第 3 期に中学を卒業しており、大学にも進学している。

いずれにしても進学するために皆中宮から転出しており、中宮の人口流出という現象をみると興味深い問題となる。

一方第 4 期の吉野谷中学卒業者である⑦⑧は、自分達の伯父や伯母とは異なり、中宮を離れて進学するような形態を取っていない。これは道路が舗装され、鶴来までの進学が可能となったことと関連性を持つかもしれない。しかし⑦⑧の進学からは、先の期間で①④⑤⑥が見せた明らかな学歴資本への志向は影を潜めているように思える。

また彼らが中宮、もしくは吉野谷村に現在在住しているのも注目に値するだろう。これにはいくつかの理由が想定できるが、まず⑦は女性であること、⑧は長男で家を継ぐことなどは、その大きな要素であろう。しかし、学歴資本を得るために中宮から出た④⑤⑥が、帰郷せずにいることから、進学とそれに伴う学歴資本の獲得への意識の違いも関与しているように思われる。

V 教育職への従事・就職

今までは進学と学歴資本に対する中宮の人々の意識を追ってきた。この節ではこういった意識の先にある、職業を考察する。この職業考察に際して、本論の要旨から離れないために、教育職を中心に議論を進めたいと思う。また教育職に対する中宮社会の意識をいくぶんでも明確にするために、戦前の教育職にも触れることとする。ここで戦前とは 1912 年から 1946 年をさし、1947 年以降を戦後と記述することとする。1947 年をターニング・ポイントとしたのは 1947 年に学制改革が行われ、市原国民学校中宮分教場から吉野谷村立中宮小中学校になり、制度的な変化が生じたためである。

さて、地理的な要因でどうしても職業選択に限界のある中宮では、教師（学校関係者）という職業は特異な存在となっている。中宮在住者および出身者で、学校関係の職に従事している者は、1912年に a 氏が尋常小学校本科准訓導に就任してから、確認しえた限りで現在までに42名にのぼる。内訳を見てみると1912年から1947年の間に就任した中宮出身者の学校関係就職者は16名、内訳は准訓導5名、准訓導心得8名、学務委員3名となっている。1947年以降は20名で、内訳は教員13名、臨時教員2名、主事3名、保母2名となっている。中宮出身でない中宮在住の学校関係者は6名で教員2名、講師3名、栄養士1名となっている。

中宮で学校教育を実施することになるのは1875年からである。その後1912年に a 氏が准訓導に任命され、中宮出身の教員が誕生する。a 氏は中宮で「三役」と呼ばれる地域の有力者であった。5カ月後に b 氏が准訓導心得として任命されるが、彼も「三役」であった。中宮で学校教育を定着させるには地域有力者の後ろ楯を必要としたのだろう。「三役」と呼ばれる地域有力者は政治的な影響力のみならず、宗教的な影響力を持っていた。彼らは道場と呼ばれる浄土真宗の寺を管理、運営しており、現在でもこの道場は信仰のより所として中宮では重要な位置を占めており、b 氏はこの道場の僧でもあった。a 氏の親族からは7人の学校関係者が出ており（内1人は戦後）、戦前の教育に大きな影響力をもっていたことが伺える。

ここで准訓導心得の役割を説明すると、これは当時中宮の生業で大きな比重を占めていた、「出作り」とよばれる焼畑農業によって、山腹に仮移住している家族の子女を教育する臨時教員のことである。戦前准訓導心得に就いて者は8名で、いずれも焼畑移住を行っている場所にある出作地定期分教場で教鞭をとっており、このような分教場は3カ所あった。また出作地定期分教場に出向した准訓導心得7名中3名が a 氏の親族である。

戦前の学校教育は、中宮の社会から隔離したものではなかった。学校関係者16名中11名が「三役」と呼ばれる世帯の成員であり、「三役」が宗教的な指導者でもあること、「出作り」という生業が学校運営に大きな影響を与え、ひいては教員経験者の数を増加させていることなどから、それは明らかであろう。

戦後になると、「三役」の成員が学校関係者になる例は減少する。代わって戦前に師範学校へ進学していた「三役」以外の3名がそれぞれ卒業し、そのなかの c 氏が中宮中学校に就任する。小学校の教員は終戦まもないころとあって本校から就任者を得られなかった。そこで当時の校長が、中宮在住者から臨時教員という形で3名任命した。このうち2名は通信教育によって、教員免許を取得している。戦前と戦後の教員で異なるのは、この教員免許を取得しているかないかの違いである。この教員免許取得というプロセスによって、戦前に見られる「三役」の影響力が弱まり、中宮における学校関係者の様相も変化することになる。また、中宮出身者でない中宮在住の学校関係者6名はいずれも女性で、婚前から教員であった3名と、結婚後学校関係の仕事に従事した3名に分かれる。

また、吉野谷小中学校で教員もしくは、それに準ずる職に就いていた中宮中学校卒業者は、6名に上る。これに結婚後中宮に居住し、吉野谷小中学校で職を得ていた4名を合わせると、10名が同校で職を得ていたことになる。

教員や学校関係の職に就いた中宮出身者は、基本的に親族に学校関係者を有しており、この面においては戦前とあまり変わらない。例えばd氏の場合、父方、母方（尾添）双方に6名の学校関係者（内訳は大学教員2名、中学校教員2名、小学校教員2名）を持ち、姉妹は中学校主事、妻も小学校教員である。また、e氏の場合は妻が小学校教員で、娘も同校で教員をしていた。このように親族に学校関係者を持つ例は6例あり、延べ人数にすると17名に上る。

ただ戦前と根本的に異なるのは、戦後では職業選択の一つとして学校が存在していることであろう。そして、このような職業選択を可能にする手段として進学が必要となったことである。教員になるためには教員免許が必要となる。実際終戦直後に臨時教員から教員になった2名を除いて、戦後の学校関係者は進学のため一時中宮を離れている。ただ、学校関係の職に付いている人は、中宮から離れても、教員という職を放棄する事なく中宮にもどることができる点が他の職業に就職した人とは異なる。今までで、いったん進学によって中宮から出て、戻って来た例は6例ある。このうち5例が、吉野谷小中学校に職を得ている。通勤という問題を考えた場合、教員であることは非常に有利な条件であったといえる。

しかし現在、中宮在住者で教職員に従事する人は2名しかいない。これは定年や、結婚でほとんどの人が退職したためであるが、もし学校が先の意味で現在でも魅力的な雇用先であったなら、このような状況には至らなかっただろう。この6例はいずれも、中学卒業時がA期に該当する人達で、B期にいたると教員になった人自体1名しかいなくなる。教育職に対する指向性が明らかにB期では減少している。どうしてこのような現象が生じたのであろうか。

思うにA期（特にその中でも第3期中学卒業者は8名に上る）では、学校は通勤可能な雇用先である一方、学歴資本に見合った就職先として注目されていたのではなかろうか。この時期、中宮から通学できない学校に進学すると、中宮に戻ってこないのが普通である。それは、大学や専門学校で高等教育や専門教育を受けても、それを活用しつつUターン就職することは中宮からの通勤に限界があるために不可能であったためだろう。学校はその意味では例外的な存在であった。だから中宮出身者や在住者にとって魅力ある雇用先でありえたのだろう。

しかしB期に入ると、学校への就職という指向性は減少する。道路が整備され金沢圏まで通勤できるにも関わらず、数の上では減少しているのだ。ここには居住空間としての中宮に対する意識が関与していると思われる。スキー場などの新しい雇用先が確保されているにもかかわらず、Uターン就職が少ないのも、そこに起因するのかもしれない。また、家に対する意識も変化してきている。現在も教育職に従事している人は、中宮在住の2名と、中宮出身だが在住していない2名である。中宮在住教員は夫婦で、同家は道場を運営しており（ただし戦前の「三役」の家系

ではない)、門徒との関係上中宮に在住する必要がある。一方在住していない2名には、家を守って中宮に住む必要性が乏しい。そのため他の地域に移転しているわけであるが、そうなってくると本来雇用先として学校がもっていた、通勤可能でしかも学歴資本が生かせるという利点が失われてくる。教育職がもっていた強みは、中宮を同地の人達が居住空間として認めていることを前提としていた。その意識が希薄になれば、当然教育職への志向が減少することになるだろう。B期に教員になった人が1名しかいないのは、そのような住民の意識変化と関連性をもっていたのだと思われる。

VI ま と め

以上、学校教育と中宮の人々の意識がどのようにかかわっていたのかを概観してきた。そこでもう一度、1947年から1989年までの意識の有り様をⅢで分けた第1期、第2期、第3期、第4期の分類に従って整理しておく。

第1期の高校進学はまだ黎明期であり、男女格差も存在していた。第2期になると、高校進学率も向上し、男女格差も減少する。また第1、2期の高校進学の特徴としては学歴資本を獲得し、安定した職を得る道具となっていたことが上げられよう。北陸電力に就職するために、男子が好んで工業系高校に進学していたのは、そのためであった。ここには、進学をめぐる個人の戦略的な意識が現れている。

第3期には、この意識の中に大学や専門教育といった新しい視点が芽生え、進学に伴う転出という型が出現する。Ⅳでみたのはそのような事例であった。この進学に伴う転出を実行した人のほとんどは、その後帰郷せずに中宮外で就職している。これは学歴資本を獲得するために中宮を出て進学しても、その資本を活用することが中宮では一般には困難であったためだと思われる。それは逆に例外的な場としての学校をクローズアップさせる原動力にもなった。第3期に中学を卒業して教育職に従事するようになった人が8名に上るのも、そのような理由によるものだろう。

第4期は高校進学率がほぼ100%になる。しかし大学進学率でみると第3期から平行線をたどっている。これについては分析を控えるが、大学への進学は中宮に戻らないことを意味するだけでは言えよう。大学進学者が自らの学歴資本に見合う職を考えた場合、都市部の企業への就職が妥当であると感じているのだろう。第4期に教員になった人も、その延長線上で職業選択したと思われる。こういった人々は中宮を居住空間として適当なものだとは思っていない。しかし逆に中宮を居住空間として適当だと感じた場合、学歴資本は必ずしも必要だとはいえなくなる。しかしこれはあくまでも限定的な考察であることを断っておきたい。

いずれにしても、中宮の生活環境自体が都市部の生活環境からみた場合、ある限界をもっていると見え、この問題は現在中宮で就学者をもつ父兄に共通して感得されていることだと思われる。